

つても何も構うとが出来ぬへうら。ね前も一所も来ぬへ。さ  
 うきて宅の奴を手紙で。さう言ッてやらう。花ねまへ左様  
 ねえお花「夫ぢやア左様していたゞきませう惣「夫ぢやア出  
 かける事にしやうト。夫より茶代を拂ひ杯して。此茶亭を立  
 出まが。程遠からぬ道あるよ思ぬ同士が連立て引越かたを  
 語り合。歩行ともあく三崎の。夫が門邊に至りければ惣「チ  
 イ爰だく花「チヤ。マアとんだ奇麗か。ね住居でございませ  
 すねへ惣「余まり奇麗でもないのサ。チイ金太やね客様だヨ  
 金太郎は惣次郎「金「チノ旦那とんだ可愛らしみのを。連れて  
 が耳よ口をよせ

出さすツた子惣「ナニ。これやアノ、兼て咄しく置く。ね組ど  
 いふ嬢ヨ金「さうか成やど美しいチ。そんならい、けれども  
 龜の子姥アあんどは。最うれ止なさへ。此様な宜内室が在  
 ちがら。モシ内室さん  
 赤にま今にそこ庭日が當ッて来るからこッち庭に出させへ  
 ト。いひッ、こなたいれ花を見て金「ね前さんいれ内室の所  
 の。女中衆かへ花「へい金「夫ぢやア今自己が。裏の芋を掘て  
 来て。養てほげるから待て居ぬへヨ惣「チイく金太や芋も  
 い、がの。手前に少し頼がある。山の宿まで往て来てくんち

金「山の宿てへナ。何所だッけ子惣」山の宿といふのは東橋  
 の直手前の横町ヨ。ソラ此間手前の江戸で噂の花川戸とい  
 ふなア。爰かといつた横丁ヨ金「へエそれぢやア角に六地藏  
 此ある横丁だ子惣」その横丁が花川戸で其先が山の宿だ。チ  
 イ花どころだ花湯屋のすじ向ふで。山田といふ琴の師匠と  
 聞と直に知れまるとヨ金「夫ぢやア直に往ますが惣」今手紙を  
 書から金「其間」芋を堀て来て。お内室と女中衆にあげやう  
 と思つて惣「それは種々御苦勞だナ金」ナニ造作のありませ  
 ん花「とんだ氣さくお仁でおざいますねへ惣」無法一鐵の替

りにやア。とんだ正直でいゝから。上州うゝ連れて来たノヨ。  
 ナイねくみやお前も。姉さんね所應やる。手紙をお書ナク「  
 ハイ吾儕も書ますのかエ惣」ウン「あんど書て上ませう惣  
 「どうさ」を。今朝道で風と自己は逢たら此の頃上州か。  
 歸ッて今三崎にゐるから。一所よ其處へ。往ツた。今夜は止  
 宿て翌の朝惣次郎と一所に。往とさう書て遣んねへ。ナア花  
 モウ一晩止宿ても宜う花「宜と在升ともさうしてお硯箱ハ  
 惣」彼處の違棚の下にゐる。たゝか巻紙もある。はずだ是か  
 をくみも惣次郎もお絹が許へ送るある。手簡認めて上書お

し惣金太め。何をしてゐるやがるだらう金「サア」く澤山掘  
て来た旦那手紙は出来ましたか惣出来た〜金「夫ぢや  
ア芋の泥を落して。直に往ませう。龜の子姥アの所へなん  
どは中〜往さやアしねへが。内室の宅へあら。直に往て來  
らア惣夫ぢや道で何ぢ喰て來いと。自己が名お呼金太郎を  
紙にひねつて渡しけをば金「コリヤア難有。モンお花さんと  
か。芋を能洗ッテ置たから。お内室に煮て上てお呉。さうして  
中飯を喰あら。糠味噌の右の方に。夕アつけた一口茄子と胡  
瓜の細があるがら。旦那に出してあげて。お内室さんは。生

漬の嫌ひあら。左の方に古漬が、いくらもあるから。かくや  
にでも煮てあげてお呉。大かた今日もお歸りは。遅のらうと  
思ッく。お晝の支度がしてあいから。今に魚屋でも來るだら  
う。誠に旦那が居たり居あつたりするので。お飯をくさら  
せるよは困り切るヨ惣余計をと言ねへで。疾く往ッて來  
ねへ。夫からその前に玉屋へ往ッて。三ッ物をよこすやうに  
左様言ッて來て呉ンお金「夫ぢやア往がけに。左様言ッて往  
ませうト。かの二通を懐中お足早にこそ出行けれ花「彼  
仁とお二人限りぢやア。穢物が嘸ございませう。ナットお洗

濯ソシをいたしませう。惣それ夫それやア氣きの毒どくだが。その簞笥たんすの引出ひきだきよあるから。やッて貰もらはふ花はな「左様ひだりさまのたえて吾儕わたくしのお暇いとまをいたしますから。お跡あとで思おもひ入りお可愛かあいがり。遊あそばせ殊ことによつたら。一兩日いちりゅうじつは逗留とどまでも。宜よろしうございませうから惣それ夫それだつて眠めのわるいのに。ろんを事ことが出来るできもれか花はな「貴君あなたのとをお案あん遊あそして。お眼めがわるくおあり遊あそしよのですから。あなこれ湯療ゆりょう治ちから。じきに能よくありませうチホ、惣それあんまり大きき聲こゑをしなさんか。庭にわに居ゐるから聞きへるはナ花はな「ホニニ被い為ら入りおと思おもつたらお庭にわに被い為ら入りた惣それ「チイ〜お

組くみ〜花はな「おくみ様さま若わか旦那様だんなさまの〜「ハイ召めますのかエ惣それめしますが大造だいぞうだノ。眼めはどうだ大分だいぶ宜いやうぞやアねへかくみハイ貴處あなたにお目めにか〜ツ〜せへか少しは宜いやうでございます惣それ夫それは何なによりだ。どうぞても晝時ひるじ分ぶんは宜いが。晩方ばんかたがわるくあるノ〜「それに雨あめの降ふる日ひや晩方ばんかたなんぞい。いつでも考かんがへとを致いたしますのだから惣それ夫それ「斯あう斯あう逢あやア。何なにも考かんがへるとも。案あん考かんがるともおからう〜「こんな嬉うれしいとはございませんが。昨夜さくばんは御様子ごようすでは。モ智清ちせいさんと。お睦むつしそうでございませうから。いッそ苦勞くらうでございます惣それ夫それ「ナニ人ひと。智ち

清さんは。お前も知ッては通りの身のうへ。未始終どうするの。斯するれといふ譯もあし。風と一たとで。一度や。半分は。間違せもあつたれども。今もいふ通りの分解。最うく。是限りあすこへを往かねるうらそんあとは察し被成あ。夫よりやアお前こそ善様に初物を振舞ッたらう。アアア。憎らまいとを。花を呼で聞ては覺遊バせなど。雨眼又泪を惣一嘘だから堪忍しとトおくみの脊中を撫る。夫だッてあんまりあ事を被仰るものを惣申戲ぐはナト脊中をば。撫し其手でおくみを抱へ惣苦勞するせへか疲たノテ。アレおよ

ま遊をせ。花がお臺處にとります。惣「花は先き裏の井戸へ。單物の洗くりに往たひナ。さうでございませるか。夫でも直に歸りませう惣能はるンあとをいふあア否なら止ぬへと手をはあま。アレサ否ぢなアありませんけれども惣嫌であけりやア。おとまていぬへとおくみが手を持って引よすれば。引れながらに身を寄添袖に顔をばうち隠す折から玉やが「ハイお詔が出来ました

第十七回

憊而其翌朝お花は。疾よ起出て。金太とともに勝手を働き。

膳部の支度も整ひ玄頃。惣次郎漸眼の覺え様子なれば。烟艸  
 盆も櫻炭を入きて枕邊へ持來り花「最うお目覺でも宜えら  
 ございませうト。云捨て勝手へゆく」ソレ涉覽遊ばせナ  
 先刻から起ようと存じますのに。貴處がマア宜くと被仰  
 もんだから。花に間が悪いちやアございませんか惣「ナニ間  
 の悪いとがあるものか。夫婦が一所も寝るのはあたりまへ  
 じやアあいか。夫とも人に見つかって。外聞がわるきやア。  
 最うく一所も寝めへ」左様いふ分解ぢやア有ませんけ  
 れども唯間がわるいとやたんでまのチ。はらさんざ人よ苦

勞をさせて置いて、そんなにねいぢめ遊さずとよぬぢやアご  
 ざいませんか惣「いぢめる所か自己の。可愛くツてく」天窓  
 から喰ッて仕舞たいやうだ。此時おくみはに「うまく被仰  
 ままねへ惣「自己の少しもうまく言やアしねへが。お前こそ  
 うまく言ア」ナニが惣「夫でも夕アこれで死でも、本望だ  
 と言ッたくせにして。問がわるい何そといふからヨク存ま  
 せんヨ憎らまいた惣次郎を惣「アイタ、ゝゝそんな可愛し  
 い指で。ひどく痛の。此様子ぢやア善公を。つねりつけてゐ  
 ると見ゆるノ」亦アンナ憎らしいとむかり惣「モチくつ

ねるのは淨苑じやうゑんだくみ「それぢやア最もう。うんを事を被おつしやい伴ばんますか  
 ヲ惣そう「ハイかしこまくなまは畏おそりました。中直なかなおりよ一服やくづけ附つておくれナくみ  
 ハイモウ起たぎませうか惣そう「モウお起おきよふ夫おとこよと二人ふたりは起出おきいで  
 うがひ手洗てうせんや朝飯あさげも濟すみかくみを送たくりて惣次郎そうじらうもともよお絹きぬ  
 が許もと辱いたらんとて。夫おとこくよ身支度みしたくあし。金太かねたを例れいの留守居るすゐ  
 とあし。觀音くわんおんへ詣もつぎをまて。お絹きぬが許もとへいたゞければ。ね花はな  
 は一足ひつあしさたへ欠拔花かけぬけ「ひ師匠ししやうさん只今ただいま歸かへりました  
 あるゆへ弟子でしのいへるとばに絹きぬ「チャね歸かへりかへ惣さんよ  
 ならいて斯いかはいふあるべし  
 ね逢あひだとねへあんだか吾儕わたいしも嬉うれしいやうでもあり。亦またお手て

紙がみあんど惣さんの。ひ手にやア違ちがひもあま。事ことにおまゐは  
 附つてゐるし。安心あんしんはまてゐるやうあもれ、左様さやうでもあひ若  
 イ者ものだから。そんな間違まちがひでもありやア。仕つかいかと案あんまて  
 見みると。限かぎりもあく安心あんしんまたり。案事あんじたりしていたは花はな「さ  
 うでございしましたらうとも。全体ぜんたい吾儕わたいがねささへ。歸かへらうと  
 存ぞんぞたのでござい升しやうが。お穢けがれ毛けのもでもねすゝぎを。いたらう  
 とぞんぞて絹きぬ「さうかへ嘸まアノ嬢ぢやうは。嬉うれしかりたらう花はな「モ  
 ウか二方ふたかたとも被いらつしやる爲入ゐりいれでございませう絹きぬ「その積つりの紙し  
 で有ありから。今朝けさに未明みへい起おきて掃除そうじをしり何かして、久ひさまぶ

りでどんなに働きましたらうと。咄しのうちに表よりおく  
 みと惣次郎は入来り。すぐにね組が案内しく。惣次郎を客の  
 間へ通玄奥へ来りて両手をつさく姉さん大きに遅きはり  
 ました絹「浄祖師様の浄利益で。とうく浄目にかゝって能  
 かりたね。ドレ吾儕も浄挨拶をやらう。お組おまへお烟草  
 盆を。持て往ッておくれ。お茶も這入ッてとるから。花  
 ぐちやア。何もあげるものがあから。いけあ。急いで  
 櫻屋へお吸物に。三ッ物に御膳の支度を。左様中て来ておく  
 れ、左様まで酒も極宜のをト。言附やりて座敷にいり。

一別以來の挨拶終て絹「昨夜のまたおくみが。御厄介にあり  
 まして。難有存ぞます。何かからお咄しといたしてよいやら。  
 浮世は種くで實人間は死ンで見あいうちの分解ません物  
 何や彼や御心配のよしは。花からもお組からも。伺ひまして  
 實にお察しやまえた。當家へは用達た金子なども。善次郎や  
 お牧さんが。右や左云分解はあいのです。これも近日調方を  
 つけますし。聊自己の存る旨もござい舛から。重々また。悪  
 いとばかりもございますまい絹「斯して貴君が被爲入ばど  
 んなにか吾儕も强身でございますと夫に此嬢が可愛さうに朝



に晩ばんに貴君ききみのお噂うわさばかりをゆて泣なてばかりをり舛まがから側そばで  
 吾わが儕しのちだめたり小言こごをゆたりいたして惣そう「何なにのら何なにまで  
 侈こ心配しんぱい。夫おにお牧まきさんが室むろ間まへ。來きた時ときも貴婦あなたが立りつ派ぱぢ。ご  
 返あ回いさつであつたとゆて。花はなからの咄はなしでございしました緇し「立た派ぱ  
 所ところじやア有ありません。あんまり面つらが憎にくうございまえたからッ  
 イ中ちゆう過すげましたのサ。ト此この咄はなのうちに。謎めいの酒肴さけも來きりけれ  
 を惣そう「こんなことを。お止とめされば宜いのに緇し「早さつ速そくヤスも否い物ぶつ  
 でございまえが。斯かしてをるうちだから一人ひとりも口くちの少すくあひ  
 が宜いとやのではござりませんが。男おとこ世よ帯たいで被い爲つ入りては何なにか

又また涉お不お自由ゆうでも。ございませうからお役やくには立たませずとも  
 れ組ぐみは貴君あなたれ方ほうへた置た被か成なて下くださぬまえぢ。さういたして  
 れ穢よ物ぶつなどは。拵かく花はなをあけてもよき、昨日きのうれ出いの若衆わかしゅよ  
 被つ遣はてもよし惣そう「吾わが儕しの方はいづれでも。宜いございませが俄にに  
 に。れ淋さしく成なませう緇し「淋さしむとぞんずるのも少すくしの間あ間ま  
 居ゐ馴なれて見みれば同じおなじでございませぬ。惣そう「そきはさんあもの  
 サ。夫おぢやア斯かあせへ。折角せつかくさう被お仰して下くださるとだから。れ  
 組ぐみは自わ己たの方かた置おとして。その替かり婦ふ多た川がと。やらンへ御ご預う  
 けあすつた。お小兒ちいさいのを取とり取とりせ被か成なす。おくみの替かりに自

巳の方から。乳母を献じませう。絹有がたうぞんじます。全  
 体アノ見も疾に引取とづでございましてが。何分先方に居  
 かじんで。此方危参るのを否のつて。困りさります。惣小兒  
 は念がよいからいよ絹冷ませんうすに。ね吸下さい。一  
 ね酌をいたしませう惣「サト姉さん自己の宅へも滲入來を  
 願ひます。いあはだ手狭ではございすが絹手狭と被仰る  
 と。面目もござりません惣「何事も時節でございます實の未  
 だ取留まいとだからね咄しは出来ませんか。桐生に居った  
 時分の主人が。江戸で店でも開くやうあら。何時でも品物を

送る。やうよヤシて居やまたが。是も手に取て見かい。とは  
 わかりませんが。多分間違もありやまめへ。是から上州へ手  
 紙と出えて。いよく左様あるやうあらば素の通りに。室町  
 の店を開きませう絹「夫はマア難有ぞんじます。左様ありま  
 すまば。佛も無喜びませう。事にはお牧さんや。善さんね顔  
 も見返すとやもの。うれし涙を不惣「夫も今云通り。手に取  
 ッて見ないとは分解やせんが多分間違も有まよま。絹「今  
 よ初めす何から何まで惣「ナニね禮で痛み入ります。これも大  
 恩のある慈母へ送る寸志「眞正にさうなさいましたら。ど

んちに嬉しうございませう。惣「らんじの外長座を致志やー  
 た絹「まだた疾うございませうア。ね晝でも召あがつて惣  
 夫ぢやアお絹さん斯しませう。格別の用をさけりやア。自  
 己や久しぶりだから。大勢で龜井戸は天神へ。参詣いたまや  
 せう。柳嶋の豊國まで。少々用向もありませんから。姉さん  
 左様なさいましな絹「吾儕も久しく。物見遊山をいたしませ  
 んから。ね供をいたませうト。是より皆支度をさし花木  
 嶋から小室井をかり。龜井戸へも参詣をさま。ねくみを連て  
 惣次郎を。三崎に戻りけるが。翌日桐生へ件の書状を出きた

りけるに。何れも左右あぐ承引て生糸生絹をはじめとして。  
 御召縮緬廣帯あんど。日あらず送るといふよまを。細くと認  
 めたる。返事と共に送状を來りければ。這はまたあまりに  
 疾かりと、思ひあがらせんすべさく。お絹の許も此よしを  
 言れくり室町の店を再び買求め。根繼をさし。庫を塗かへ此  
 混雑にいとまあくて。智清の許へもた榮が。かたへも絶て音  
 信せざりけるぞぞ

第十八回

惣「ナイく金太や。昨日佐羽から來た箇を解たか金へい

解とぎました惣もつと「なんた金かね緋ひの太織ふとりと。絹中形きぬぢうがたでございます惣、  
 夫おとこやア板いたの方ほうが召おめしと南部なんぶだらう。店みせも出来できねへうち  
 から斯荷からにが来きても困こまるノ。先刻さつぎ貴君あなたがお湯ゆへ。入いッしッた  
 跡あとで久兵衛くべゑさんとか。いふ仁ひとが来きましたヨ惣、久兵衛くべゑ榎藤えんどうの  
 久兵衛くべゑさんか田四たしの久兵衛くべゑさんかえらん。アノ可笑わかしな天窓あまなま  
 の仁ひとで。ございます惣「アハ、ハ、わかつた新田しんでんの飯塚いづつかだ。  
 小網町こあみでうにゐると言いたらう。柳川岸やなぎがしの中村屋なかむらやに。ゐると被仰おつしやい  
 ました惣、ウうンんやア金八きんぱちさんの宅うちか。トこの咄はなえのうち  
 表おもてより、案内あんないも乞こほず入いり来るものあり。是これ別人べつじんあらす。池いけの端はた

の智清ちせいおてあり。思おもひがけねバ惣次郎もつじらうもねくとも、ともよお  
 どろきまが惣次郎もつじらうの急度きつど思案しあんをし惣「コレハ智清ちせいさん。大き  
 に汚無沙汰よふさたをいたしやえた、ね組くみね茶ちやでもあげねへか智「ナ  
 ヲね茶ちやもいこやきません。折角せつかくねひつまゑい所ところへ、ね邪じやまに  
 参まゐッて。お氣きの毒どくでございましてね。先達せんだつての汚口上よごぐちやうと。  
 ひ的てつさり此様このやうな事ことだらうと思おもつたれ。オ。おくみさん暫時しばしト。  
 むはれてねくみお氣きの毒どくさうに「その、ちは暫しばしく。ね茶ちやを  
 ひどつめまあがりまし智「吾儕われらやアお茶ちやのいたつたません  
 ヨ。モシお組くみさんね前は顔かほに似にあはさいねそろし仁ひとだす。

實正ほんせうに今時いまときの小娘こむすめど。小ぶくろは油斷ゆだんがなりやアしあひ。モ  
 シ惣しづさん何も吾儕わたしが。情合じやうがひをおまゑやアわるいと。ヤ分解わけえ  
 やアあいが。面當つらあてらしくね組くみさんと。情合じやうがひしくね吳くきはる事  
 もあいなやアあいか夫おとこも何も女房氣にやうぼしどりで。おくとや茶  
 をあげなも。能出來よくたじやアあいか。吾儕わたしが此様な身分このよな身分だか  
 ら。どうなる事ことも出來できあひと。高たかをくゝッてね在いだらうが。  
 念力ねんりきは岩いはをも通とよすとかいひ外ほかから能覺よくおぼへてね在い被成いでなさい。また  
 お絹きぬさんもね絹きぬさんだ斯かうして爰こゝへよこして。お置たきなはるく  
 らいぢやア。は存ぞんじあひともなからう。吾儕わたしの宅たくへお出ででか

ら。種いづくどとお咄うたしについて以前いぜんは能よくね暮くらまのが。急きゆう又また稽古けいこで  
 も被成なすつちやア。嚙御さざんか不自由ふじゆうだらうと。お察さつしやて涉本家はんげは素もと  
 より。お親類しんるいがたへもは披露ひらうやて。あがれるやうにまて。わ  
 げたのも恩おんよかけらやうじやアないが吾儕わたしの推舉すいきよ。うまを  
 何も承知じやうちまて妹いもうとを爰こゝへよこしてくれる。事こともないまやアな  
 いか惣しづ夫おとこりやアお前まへさんにも。似合にあひねへとを被仰おつしやる。お前  
 さんと自己じこと斯かういふ申まをだか。どうだかお絹きぬさんは。知りやア  
 しまいまやアないの智ち夫おとこりやアしらあひか知りませんが。  
 夫おとこにした所ところの吾儕わたしの宅たくで。出來できたとだから。一應いちやう吾儕わたしの方かた

咄はなえが。有ありさうなもんぢやアないか。余あんまり分解わからなぬお絹きぬさんぢやアないか。惣むづ何もお絹さんかお前まへさんれお世話せわにあつたかはぢやないか。此事このことについてお前さんの方かたへ。お咄はなえをする分解わかれもぢやあらう。全体ぜんたい此間このまへからお前様の所ところへ。鳥渡とりわたお咄はなしに往いうと。思おもつて居ゐやぢやアないか。此このおくみを先達せんたつてお前さんの宅うちで。初はつめて逢あつてそれから出来た。情なさけ合あひだともひ被成かみなりから。腹はらの立たつのも無理むりはないが。コリヤア自己おん己みが幼少ちいさい時ときからの言号いひかぎでトいとんとせしを智ち「モシ惣むづさんなんば。吾儕われらが。お心素こころもとだと言いつて。言号いひかぎとは氣きがつかぢやアあつたねへ。エ

、モシ此間このまへ吾儕われらの宅うちで。此嬢このぢやうにね逢あつた時とき。言号いひかぎぢやア其そのやうなぢやんとか彼かとか話わえが有りさうぢやアないか。ヤレお嬢このぢやうは亭主ていしゆがあるもの。おんのと浮氣うきなとばかり。いつてお在いてぢやアないか惣むづ夫おとこには段だんくわけのあるとサ。今いまお前まへさんのお話はなえに。お絹さんから種いろくお話はなえが有あつたト被たつ仰おんたが。定さだめし委くわしい咄はなしを。お聞きかさいましたらう智ち「ナニ別べつにくわえい咄はなしも聞きかせんが。以前いぜん室町むろまちで能暮よやくらえあすつたのダ。不仕合ふしあわせが續ついて山の宿しゆくへ引移ひきうつつて。仕馴ぢれぬ琴ことの師匠しせうとぢやアないか。断はなえを聞きたばかりサ。夫おとこがどうぢやアしましたへ

惣別（おつべつ）にどうもまやア仕ねへが。素（もと）自己（ごじ）が久松町（ひさまつちやう）にゐる時分（ときわ）から。未（すなは）は夫婦（ふうふう）と親（おや）くが。貰（もら）ッて一所（いしょ）に居（ゐ）ましたのを。自（みづか）己（みづか）も風（ふう）とした心得（こころえ）違（ちが）ひから。家出（いけだ）を去（い）て久（ひさ）ま（ま）く。桐生（きりう）へ往（い）ッてるうち。弟（あに）の善次郎（ぜんじらう）といふ者がお組（ぐみ）を。女房（にようばう）にしたいといふ。亦（また）親（おや）くも左様（さやう）させたいといろくお組（ぐみ）を進（すす）めた所（ところ）が。藝（げい）喰（く）ふ虫（むし）も好（お）くで。自（わたし）己（わたし）のやうな者（もの）でも。亭主（ていしゆ）と思（おも）つて従（したが）がはず。亦（また）お絹（きぬ）さんへも種（いづ）と。今（いま）の繼母（けいぼ）が進（すす）めたさうだが。お絹（きぬ）さんにも列（は）付（つけ）られ。そこでふくみは室町（むろまち）へ歸（か）され。夫（お）か（ら）らお絹（きぬ）さんも。亭主（ていしゆ）に別（わか）れ。段（だん）く不仕合（ふあひあ）がうち繼（つ）ぎ。終（つい）よ

山の宿（しゆく）へ引込（ひきこ）まれたさうだが。先達（せんたつ）てお前（まへ）さんが。お絹（きぬ）さんといふ琴（こと）の師匠（しせう）と。いふお断（はな）しも有（あ）たけれども。よもや室町（むろまち）のお絹（きぬ）さんとは。夢（ゆめ）にもしらず其後（そのち）お宅（たく）でこの嬢（こ）に逢（あ）ひ。どうもた分解（わ）けで。爰（こゝ）にゐるか夫（お）とも。弟（あに）と夫婦（ふうふう）になつたかど。夫（お）で余所（よ）ちがら。お前（まへ）さんにお聞（き）やたのサ。夫（お）から翌朝（あしたあさ）歸（か）るを待（まち）て道（みち）で様子（やうす）を聞（き）たらむ。斯（かう）くだとは。なめく何かの様子（やうす）も。あり。あきて別（わか）れた中（なか）でえさ。夫（お）からお絹（きぬ）さんにも逢（あ）ひ。み。此方（こち）へ引取（ひきと）り。この事（こと）を。お前（まへ）さんよも。委（く）しくお断（はな）し申（ま）た上（う）でこれ迄（き）のとは。お互（た）いに夢（ゆめ）だと思（おも）つてお貰（もら）ひ

申たい。尤もつともおくみが出来たからお前さんが嫌いやにちつたやうで。不實ふじつだと思ひなさらうが。ゆこきの浦うらの引網びくあみも。度たぎかさあれば顯あらはるゝで。世間せけんへばつとした日ひよやア。自己ごア免ともあれ。お前さんの爲ためにもありますまへト。事をわけたる惣次郎そうじろが。と葉はに智清ちせいの漸暫やうしほし返回いらへもささでありけるが。吐息といきとともに云るやう智ちあるやど左様さやまお聞きやて見みりやア。お組くみさんは天晴あつはれていざよ貞女ていぢよ。そんな事こととは少しも知しらず一圖いちづに吾儕わたしの宅うちで。お逢あひでから出来たどどぞんぞとへ。女おんなにあるまじき悪口あくこう雑言ざつごん。お組くみさんれ貞女ていぢよにくらべては。云ふやうさき吾儕

の身みもち殿様どのさまが取とりわけて。涉ひんふ便びんにればお召めした也へ。お前おん様のねばし召めしで結構けつこうに仰た付せつけられたを。榮耀えいように余あまツく色いろぐるひれくみさん先さきやどの失禮しつれい。さぞね腹はらが立たちましたらうが。何卒なにとぞ堪忍かんにんしてください。モシ惣おつしやうごんさん被仰おつしやうごん通り。おれまでのとは無なき昔むかしとして。幾末いくすまなが永ながくね心こころやすくねがひます。おくみさんも是迄これまでの通り。折せりく遊あそびに召入まいて來こさい。只今ただいまのとは姉あねさんに。お沙汰さたおまに下くださいと。流石さすが高位かうゐの涉部おへん屋様やまと仰おんがるゝやどありて。先非せんびを悔くひての詫演述わびこうじやう。おくみは素もとより惣次郎そうじろも漸やうやうく安堵あんじのおもひをさま。夫これより智清ちせいをさま。響應もてなし。黄昏わうこん



ごろに家路にいたりし。然してのちは猶更にたがへに。安否を音信て。魂切大かたあらざりけるとかん

惣次郎は漸もすれば。室町よりたり。普請の差圖をか。し。或は工手間を増えて日限をいそぎけるもい。日あらず修復と。のいければ惣次郎がよろこび大方あらず。殊に桐生の爰彼方より。注文せざる品迄も或は馬積。或は倉が野より舟積まで。送りなきばいよく吉辰を撰みて。店開をせんとお絹をも。室町へ引越させ。ね絹が一子由松とて。今年三才にありけるを名前人と志。

彼金太をば金兵衛と。改名して店を預り。尙桐生より業ふあれたる手代を呼寄。子僧または帳場あんどは。江戸よて抱へ。諸事は惣次郎後見えて。以前は糸一ト通りの店ありしが。這度は呉服綿類まで。品を撰みて。下直を旨とせば。繁昌いはん方ぞかし。さるからに久松町ある善兵衛も惣次郎を。勘當せしを今更悔みく。人を頼み惣次郎も松坂屋の身代を譲らんと。しばくろのよしを言込め共惣次郎更に承引す。まづ表向勘當のわびをかま。這もまた後見。たらん事を望みければ。善兵衛今

はせん術すべなく。善次郎ぜんじらうに名目めいもくを譲りゆづ。惣次郎そうじらうを後見かちけんとし  
 その身みの向嶋むかしまの別荘べつさうに。隠居いんきよをしぬ。ね牧善次郎まきぜんじの二人  
 も先非せんびをくやみ。善次郎ぜんじらうは惣次郎そうじを。父ちちの如ごとくに尊たうじみ。  
 諸事しよじ惣次郎そうじが差圖さしづをうけ。家業かりはひの道みちを勵はげめれば兩家りやうけま  
 すく榮さかげる。しかしてね牧まきも剃髮ていぱつをし善兵衛ぜんべゑとも  
 向嶋むかしまへ引移ひきうつり惣次郎りやうけ兩家みまはを見廻みまはり。その身みは夜景やけい堀ほりに。  
 家居いへを美びくまくしつらへ。彼かのお樂らくを此所こゝへ。引ひとりて妾めかけ  
 となま。ねくみと俱ともに住すまはせけるが。互たがひに妬ねたむの心こゝろなく  
 其その中ちゆういたつて睦むつしく。いづれも男女おんなにの子こを設もうけ。日出度

とのみ多かりける

春色しゅんしよく江戸紫に大尾おほびし

明治十六年四月廿一日 翻刻出版御届

同 年五月 出版 納本

定價金四十錢

岐阜縣平民

翻刻出版人

香夢亭

和田篤太郎

芝區新櫻田町十番地

舊東京新誌記者設計

○小三娘節用

全一冊尤モ美本  
價四十錢郵税無シ

故人松亭金水作

○貞探園の朝顔

全二冊尤モ美本  
價一冊四十錢郵税無シ

服部誠一先生校閱 三木愛花情仙編

○狂詩文幼學便覽

全二冊極美本  
定價五十錢

○三ッ巴戀の白雪

全三冊美本  
價三十九錢

○八重櫻里の夕暮

全二冊美本  
價二十六錢

○園の菊匂ふ姫垣

全二冊美本  
價二十六錢

○八重戀路の蔦蘿

全二冊美本  
價二十六錢

○春雨戀の濡衣

全二冊美本  
價二十六錢

○春色梅の花笠

全二冊美本  
價二十六錢

近刻之部

○小三金五若美登里

全一冊

○郎續編

全五冊

○實錄大坂軍記

全三冊

○合鏡心の善惡

全二冊四六本  
價三十錢

○濱れ松風

全三冊  
價四十五錢

○月雪花戀路の踏分

全二冊  
價四十錢

○粹人糸竹の棊

全三冊  
價四十五錢

同	同	同	同	越	同	同	同	同	信	二	名	陸	大	同	同	同	同	同
同	同	同	同	後	同	同	同	同	州	丁	古	前	坂	同	同	同	同	同
同	同	同	同	長	白	松	上	同	長	屋	石	本	本	芝	南	小	瀧	
同	同	同	同	岡	田	本	出	同	野	本	卷	町	町	新	傳	川	山	
同	同	同	同	岡	田	本	出	同	野	本	卷	町	町	新	傳	川	山	
同	同	同	同	岡	田	本	出	同	野	本	卷	町	町	新	傳	川	山	
同	同	同	同	岡	田	本	出	同	野	本	卷	町	町	新	傳	川	山	
同	同	同	同	岡	田	本	出	同	野	本	卷	町	町	新	傳	川	山	
同	同	同	同	岡	田	本	出	同	野	本	卷	町	町	新	傳	川	山	
同	同	同	同	岡	田	本	出	同	野	本	卷	町	町	新	傳	川	山	
同	同	同	同	岡	田	本	出	同	野	本	卷	町	町	新	傳	川	山	

○ 繪入 大坂軍記 全五冊  
 ○ 實錄 大坂軍記 全五冊  
 ○ 茨霧の面影 全四冊  
 ○ 大潮 三澤の白浪 一冊十三錢宛  
 ○ 餘聞 三澤の白浪 全三冊  
 ○ 吹雪の花笠 價四十五錢 全一二冊

各府縣發兌書肆

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同

信州 松本	同 伊香保	同 富岡	同 伊勢崎	同 上州前橋	同 越後三條	下 後佐原	同 武州熊谷	筑前 福岡	同 函館	大分 縣直入	同 美濃岐阜	橫須賀			
水林 源二	小 源二	開 文平	川 本屋勝	藤 屋文二	橋 本屋文二	淺 間屋傳財	青 柳正文	正 川悅三	松 枝悅三	林 祭助	脩 文堂	魁 文社	同 岡安慶	三 浦源助	大 塚靜喜

同  
同  
飛驒  
高山

樹屋  
機石衛門  
樹山  
十兵衛

十六年六月四日  
圖書局送人

正價金三十錢

東 京 圖 書 館

和書門

小説類

九〇函

十三一架

二五號

一册

問

問